枇杷園句集

乾・坤

163
2
128

163-128
1200800081878

枇杷園句集

乾

163
128

枇杷園士朗先生

蔬白集

浪越　朱樹會

士朗先生以刀圭餘技爲蔬菜畫
爲之題詩數首無爲雖多
七言絶句中常採摘紅紫黃
赤色四篇也清雅可觀茶
樹一根赤松樹攙比鄰西
岡枇杷園疎雨篇一茶

大正
15. 6. 22
内交

陳四隅之殊景。形容或
称琵琶湖之人。以日録篇
英麗。而富山水。東西二里
接山新月。影升庭樹。
山色對之同是。煙雲
藤如。美世賞之殊共

下故未必能多費極須
慶。又必當面嘱而歸。先生
之辭。未知能相並矣。
此集即年細樹先生所
序。洋松氏不解。也。
謂未序。頗先生

生年六歳ノ人ニ題ス

集句 其角

文化甲子秋植ル

梅井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

みしみしと内よりハるゝ蕾

歳旦

何ごともなくて春来ル元日哉

松ぞかしちりぼけもなく苔の春

俺まこしくこそうてたの千歳

賀

ひさしかるべしや二年くる年の春しき

若菜

老らかたむかの菜をひとのもらひける

吉のひろうふこそ

ちとせ八幡のゑもとを梅の菜

蕨

曉月宵死ゑれ杉村をふまるを

ゆくに杉のを垣引をり毎年生に

このまき菴あるを三月の西をと

ゆへるゑまきしこのやうを蕨を手

市半を

世のすに蕨手らん月と梅

梅

戻山を月白ゑ春来るうめの花

花さかぬうち梅をうゑる日をなうらの竜
江の上や二人してをる梅のもと
白梅の大きさうきさるる中うち
筑紫山庵のさくし秋枝氏
求よ高しこの名忘すれ
ふるさを
弱のいとしも香よ白ひらも梅の花
きさらぎ人のまうらめも食

九岳亭
うめうやぶの中まて掃ちきる
神東ようう
貫之のうるのまくらそうめの花
梅うやうけちくも春月花
芭蕉翁肖像開眼
眼も鼻も うゑの玄
ひらう男ゑ

月前

かゝぶせるかの影や嶽木のうめの花

暮雨苔法會

苔むしハうかの墓塚の白ひう那

五十八山の巖六十八山の半後もの

山路大波よハあれやそろ〳〵

まゐるほど花に素さもろもセ

山ゑ海るさ寺あるも梅の下結ひ

苔るほうし峠に苔る寺峠の松

苔るほ花のうるゆの屋このな

ゆこのしまのそ口ハ苔るのさろろ弘

小の小三庭に苔るの素り

串りて庭掃のをとこの

さ告りなれもとろ

苔るをしまれ梅ゑ塀ひしまる

鶯の声清瀧の水声つれ立て
とこてやらぬ鶯のおきぬるを外月

柳

青柳にしきせぬ世の垢ぬぐふ

伊勢にて

青柳の糸のあやめやふかの池とろ口

青柳や暮て帰る淀の犬

矢矧にて

青柳の糸はあるとも百里この郷
草子
わしの句ある雲陰
塘
小ぶくろのほくろふくゆくうんこ弘
古寺のさくらんぼうりぬ胡うんこ
初頃
胡螺貝の初味をとる嘉うな

雪

たるのさはるぬ枝もちらし

旅人よ雪ふ山ふ雪もまちの人

消のこる雪もあるのる借り

雪間

大仏のあめを見ゆくする急ぎ

雪風

明日も雨人あるもみゆるあんすもの風

雪風やむあたる擔うさ

仰雪

仰雪を海しさものとーしさ

ふるるや雪ふるうとうとうとう

雪月

雪の月雑みも雪をる所仏きぬ

雪の月松よこ不足仏おろす

湖すあれとるうちくも也さの月

花

ちくやゝ花さやとの小話一話

起くるよ花自ゝるやとの紫けぶ

蕊来るを花れと見そこそ見ぬさ乱れ

所とりのふはうて

三のりちの庵やさてるひう一百

明日　虎見菴

ちくくれて見てをれを蕊る楊弓

芭蕉堂新成矣

肖像安置しまりて

蹤るも弓月やさけりの花のみ

贈呉井

すさまぶいひしきそのよ花のみ

宇津の山ふるす

すきほとた花のうけある山路弓

四半ときそも苔人の赤ろうな

芳野行

甲子吃行に曰ひとりよりみを打ろ
たとりなるにおこりて山深く白雲
峰に立ちり湖面谷を埋んでいと
色半とるり其雨ふも峰出おほつり
なきを矢をを入るとくくれ
清ろのとくく少申るをちろろ

山をくるるとくく此雨り菴のさ面
清水のやうを見るとくくのさる
んよひさ苔くる苑神は清し
芭蕉苔のさろこ所世ろるや
とのろ面ひるを思ひむるろ仏を
さくろ不ろ子立ろ立ろれろ
方ひ来るも清水をけうへ仏と
花をまろに常住の月清ろ金

いとさみしうなりぬるし
世をはなれてあるとき　山路に
嵐山　さらしの
松さくら一本置ちりあゝ山
花七日もしくはさぬ嵯峨の宿
如来ゑ嵯峨ゑゆきて
法華ゑ入て
木母寺

花よ鉢いうちなる罪ほろぼらん
年ゝに春の見やうのかはりゝ
眉山の苔見おろす豊宮崎の文庫
をもるゝ山に深ゝ山村雨ふる
うゝ神ふる入る山のやうをあやや
とさへおもゝ花ゝ
苔の木にむすゝんまる菴も

帰路

すれのうのいひくもとる山路哉

さくらの土ハ踏分の土ちやる

路ようちやをてらひゆく

ちとせあるあ間させうの寺路の

神宮うの詩

焼塩の寺路のさくら

ちりうる

玉堂行

玉堂のやうをみるにたつ風るを鄙

しうの林しきを用ふる多農

桜ふ常ハの山居にむせふるいつれる

林しのうさんさ花ハ鄙ハ一ふて

用ハ百千にわらる百千にあるふ人形

多のしとをす況や一ふあるふ人をや

世のうさまるら住まるとうを住る人

ゆゑあんちいさき松の菴ホ文机の外
見るものなくかたくなに同じさまし
生る僧のありけるを茶を煮るいと
ある人なてこらせ給へとうち
見生るのこゝろこるものもいをすらも
やはらしき標をそこの石に尻うけて
花のもしたもとぶらもはちさるや
ぬるとおもふるとかくゆかりぬ

ゆへハ仏ハ[illegible]ゆゑ[illegible]ほ[illegible]に
有る僧の戸をさしとめさるあそ
ゆくさきなるを庵しるれ日を要発
かゝれこゝを見るものを紙くしく
小倉の山ぬをとゝき木の宮
つゝちり居る
鶯やおほつかなくもなれ
を口さきみなれこの僧のおもかりこゝ

菜のようく老てこの侍るもとはしと
むらゝ小きるかとくさのうちも
いつもぬ

涅槃會

あしわとに見つるかふるの八佛式
道人のもてしてゆきさぬ涅槃像
新買に神くひとをへも祝ちん載

紫菜 花

紫の花よ大名ゝるる林檎の毒

桂五亭

菜の花にうあすあの梅云
かゝれひかれ頭すあそ
三ちさせるうもも見とする子雀
先に入るうの
紫の花にロたうあうの帰雀
梅よ肥ゝう菜のを吸つあるもなし

霧入や小さき苔をうちぬきて

帰鳥

三井二夜あそぶ

西湖

山ま一度ぬぎ捨よの夏ゑ

然谷よて

ゑるをとよ入る然谷無れ清の寺

蝶

花まうと来れば蝶ゆきと蝶と雪

堂

ものみ思ふる

みけし人形をこは引

風呂ゆ

風呂ゆきみ花の桂弓

桂

ぬるゝ花ゆ

ぬのうきを常桂

人もふえのかつもふてうの山もあり

燕

ひるは農係よりもあらぬ小白いちの
空木はむ中を燕の往来かな

雉

かへるまゝ帰りの焼の雉の尊
ほろ〳〵と小笹は雉なく柏子哉
ほろつるしてはみなくきて伐哉

幻住菴にて

松もゆの雉ゆへうと菴のあゝ

雛

ひなのかるる笹のうみるとこてあゝ
すゝめるもまるるや雛の膳まいり

桃

伏見ものと日こうれて来るものの笹

以下 久能山の歌とうた

以下略

藤

藤のさかりもあらくもうかりとあふぎ

実半日みぞをゆるしはあるし半日の

ぞをきふされて宋はねるさきものく

小原の森よりもちひるゆの雪に

ゆしたりし後世菩提の所の者

宋をゆるに皆をとこれは宋引むす

菴のうちに松の枝折ふるふ半日

の東八主人もゆるしまつ屋し遊

笠に琴を弾て月をのそ友とすと

ふふのわうさくろをへく

山藤の枯むしみし住居弘

題しらず

ぬるはりの小屋の雪の底
父母のあるじを外にをくすめ
義しき砌に小松のみどりかな
月花を折る見られぬ松の風
花とりやさらでも竹をみどりえ

善光寺に西行とする人の

会佛の奉ハ月風身あくひるおひ
半てし五明月庵に見れハ老さる
ひと生にるるまてに佛の手をとらも
ゆ面てそと見伸拾ちれまる
元の袖うちてらふちしさもなくよろ
かひおうす群集しるてかけ
ちき

朝風くる掃かをれ生うち

暮春

あさくさしたゆく蕨の門
ゆくすゑをあすもあすもの日影哉

椿堂輯

枇杷園句集巻之三

夏

更衣

ふるさとハ父のまの筍人更ル

老懶

更衣人のきもしきにおとるなぬ
和のすがも肌
和のすがもしらるる姫ゆふ男うな

時雨

義しきやうるのみとあれ
ひとあす思ひ出ても月花の面
むかふ面むかふ降もまるを時雨
住ふしの橋うるとうるとみれ
ゆたやまよ所ハ三ヵもあれ時雨

岩提山宣堂よりの
公仏を米かむやうに ほとゝぎす

あらぬ宮よ六一ちんのひとゝおれとゝ
大尊法砂の風四面をこよひ紫
月弱高よ作てみるほとゝぎすの
来屋さ者しきりとて二三ヵハ
例の瓢携来て松下の陰に蟹の足
かうちちしぬ
遠よい誰をやらをひとゝおれ

為紫
金さらやいつまてをさうら為紫
れ堂厨あるる
れ堂前をつくる榊のつら紫載
菱
うくゝ所の前こ地蔵菩薩
薄仏
尾花うら崎をゆきをるた為

かゝはるに松ゆくひとの袖
ゝてあはれの上に月出し
花山堂をたきさへうら
ゆゑはさゝゝ仏をゝ海ゝ人
作る 蜻蛉
手ゝけのやてゝ供角てこ寺の門
明ゝさた竹あるもりふあるる
伊勢ゝ表はきのふゝ蜻蛉

牡丹

ちらくさく牡丹つりこむ堀の内

當茶

五六代當茶ばたくる山あらな

枝子

白きに窮屈をおきしあらな

あるべしとうすあるべしの見

苔花

苔花ちるやすぐ花咲ぬ表もちぬ

諫鼓鳥

宋は高の時に長ぶ事ましつとも花の事

數帳

連日の大あめ

日出くるまうの

康を

俳ひろやすめのあるとく數屋のが

蛍

方の男や大井原をゆくみるる

粽

此廠やむしなるのさと　粽

うりきたいくらもみとくちまきぞ

五月雨

五月雨のいとふ陸とおきゆかな

萱津の里

さみだれやめさて屋の婦る雨ぶ

栗子の歩

ひとりゆの鳴るのハ白さとる月面

竹酔日

節付枯る日もひとの手をる枯竹色

竹ふるるまま枯よりと苔のたれ

弁ちおき庭ちて人の住居もてる形俗

ありふるいにしへ人のての業を
さて学んで俄に小さき花卉を植ゑ枝さしつら
におのづからなる姿といふべきものをしく
ぶけりと思ひ出でて帰りぬ
まき四月
おのづからなるすがたハ山ゆくさま
まき四月
ゆく思て去る山田を麻の色うるる

いせ吉兵衛来り茶屋原あそぶ
田を植ゑひとしきりへつとぬいさらハ
松ぞのふるさのふるさと
雨ぞこの頃晴ゆけハまき田うち
小新
さゐよへハこんを帰れるハつるの門
吉井のさと雨と風と亭よて
ゆうせ小新の小田中ふる

蛍の頃老僧
蛍の頃やうやうとをるの小ぶるを
ゆくゆくかの
ゆくゆくやもとの老の杖
川
待ちなくうるゆく軽舟
余花山の蔵ふ立つ
静かの灯消えの長廊下灯の百

雁夜
みしらぬ宿や一寒屋に泊る蚤の露
夏月
太秦かな仏なり夏の月
夏の月ぬるくくゆるる
園扇
光琳うちうの時雨 古園

清み
蒼る北斗を蒼くす清みかな

蟬

蟬の口撞きて蟬なくホうみかな

蓮

蓮ふる沙のいろさよ蓮の花

暑

あつさ日や小庭のまゆふ迎へ

大蟻のたををあまくあつさ哉

蟬

蟬なきぬ撞木さしぬる峰の

夕さちや氏を蟬の哀の

納涼

あ月一北斗みるまと栗と繰

ふこ月ふ月すき月の月一哀

檀溪

すゝさに人の来始るすゝ菴うち

丙午九年六月小笠原ゆきぬ谷の
ひまく雪をたゝ桜原のおく〳〵花を
孤〳〵ゝ四時のけしきひとつとして
のこるものなし　何を別に仙境を
尋ぬる

小〳〵おのの多さよ小笠原の多きみ
れ板
南猿〳〵ゝのきや苔いろ氏猿小

宇洋輯

163
128